

魚のタトゥー

藤原 あゆみ

三十歳になった記念に、魚のタトゥーを入れた。場所は悩んだけど、仕事に支障がないように右の腰の少し上あたり。水着になったりしなければ分らないようなところだ。昔から魚のモチーフが好きだったし、独身で、彼氏ももう何年もいない。仕事と家を往復する毎日を送る私には、世の中は毎日何だか息苦しくて、いつそ魚にでもなりたいたいな。そんなことを考えていた夜に決めた。つまり人生に少々刺激が足りなかった。よくある高価なジューリーや腕時計より、とびきりの秘密を自分へのプレゼントにすると決めた時の方がわくわくした。実家にもずいぶん顔を出していないから、まあバレることはないだろう。当日になってもものすごく怖くなったけど、何なら施術中も痛かったけど、何日か経つとじわじわと高揚感がわいてきて、私の体の中で一番愛着のある場所になった。痛みと恐怖を共に乗り越えた、自分だけの初めての大きな秘密に心が震えた。子供の頃絵で描いたような、絵本に出てくるような、優しい雰囲気のある魚。かわいくて、着替えのたびに毎日撫でていたからか、気がついたらこの魚は動き出していた。

いつもはお湯が白く濁る入浴剤を湯船に入れておけるけれど、その日はたまたま切らしていて、まさきのお湯に浸かっていた。デスクワークでぶくんだ足をマッサージしながら、なんとなくいつも通り魚に視線を移動させると、なんとそこにあるはずの魚が見当たらなかったのだ。見間違いかと思って驚いて、すっと立ち上がってバシバシと水をまき散らしながら焦って探すと、私に気づいたのか、左の腰から慌ててもとの位置に戻るところだった。元の位置に戻ると、魚は何事もなかったかのようにびたりと動かなくなった。魚を数秒見つめ、目の錯覚かと思い、もう一度湯船に浸かった。しかしどうしても気になる。試すようなことをして悪かったが、魚の目を盗んでもう一度私は急に立ち上がった。すると今度は左腿のあたりに居て、戻るまでの道のりは長い。私の両足の間を通して（ここはどう通って行ったのか見えなかった）、おへその下を通して、またもや何事もなかったかのように静止した。これはもう見間違いではない。信じられないと思いつつ、思わず魚をトントンと指で軽くたたくと、いたずらがばれた子供のようになり、すばやく魚は跳ねた。

私はお風呂が好きだ。昔は面倒でどちらかという嫌いだったが、数か月前から、生活の中で一番好きな営みになった。お風呂の中でだけ、魚は自由になる。いつもは私の右の腰の少し上にしかいられない魚も、お風呂の中でだけは私の体中を好きに移動できる。そして私は、自分の人差し指で魚と追いかけてこいたり、おへそや指の関節の間などに来させて、しわで魚の形が変わるのを眺めたりできる。私の親指くらいしかない体をゆっくりと撫でてやると、その時だけ魚は気持ちよさそうに体をくねらせたり、跳ねたりする。ボディソープも好きみたいだ。体をボディソープの泡でいっぱいにしてやると、魚はいつも滑らかに体中をすると大げさに泳ぐ。シャワーの時はあんまり上手に動けないみたいだったが、いつからか、コツを掴んだのかシャワー中でも滑らかに体を移動させられるようになっていた。たまたま、居なくなったかと

思つて不安になつてからだ中探していると、私の目から逃げるように泳ぎ回る位ならずまでするようになった。今までの人生でペットを飼つたことはなかったけれど、ペットと暮らすつてこんな感じなのではないかと思う。魚と一緒に生きるようになってからは、人から「何かいいことありましたか？」と問われることが多くなった。会社のおじさんたちは、私に恋人でもできたのではと邪推しているに違いない。

まさか、魚が悩みの種になる日が来るなんて思つてもみなかった。そしてその悩みの種は成長し、ついに明日花を咲かせる予定だ。でも毎日トレーニングしたし、きっと大丈夫。鏡とにらめっこして悩む私の右頬には魚。魚もなんだか不安そうに見えてきた。「ついに明日だよ、練習通りちゃんとしてね」呟いて鏡越しに目を合わせながら体をつつく、不安そうに小さく泳いでいたのがウソのように、素早くするりと一回転して見せた。毎晩のトレーニングはなかなか大変だった。魚はお風呂でコツを掴みすぎて、今や水に濡れていなくても自由に動き回れるようになっていた。ペットの成長とはなんと早いものか。魚と一緒になつてもう三年がたち、私には二月ほど前に彼氏ができた。しかし、魚のことはまだ告白できていない。彼はあまりにも真面目な人なものだから、言い出せない。というか、こんな不思議な魚のことを、なんて言い出したらよいのか、私にはどれだけ考えても思いつかなかった。それに、できるだけギリギリまで、魚を私だけの秘密にしておきたいなんて我儘な自分もいるのだ。そこで始まったのが、一人と一匹の夜のトレーニング。毎晩寝る前に私はベッドで裸になって、自分の体中をぎよるぎよると素早く観察する。そんな私の視線から、魚は逃げる。人の視線から逃げる訓練だ。魚には苦勞を掛けるが、とりあえず明日は彼の視線からできる限り魚に逃げてもらう。よしと覚悟を決めて、久しぶりに服を着て布団にもぐりこんだ。魚も定位置に戻つていて、もうびたりとも動かない。明日に備えて英気を養っているのかもしれない。ちゃんとお部屋も暗くしてもらおうよう上手くやるから、一緒に頑張ろうね。

カーテンの隙間から差し込む太陽がまぶしい。なんとなく眠りが浅く、彼が私の腰の右上辺りをつつく感触で完全に目が覚めてしまった。彼はわたしが裸でいると、隙さえあれば魚を見つめ、撫でる。私よりも魚のほうがお気に入りみたいでちょっとくやしい。本当に不思議だね、なんて真面目な顔で呟きながらつつかれると、私はいつも何だか照れ臭くなってしまふ。初めて言われた時のことを思い出すからだ。初めて彼にそういわれたのは、彼の家に初めて泊まつた日の朝だった。私と魚は、彼に見つからないように、夜な夜な秘密のトレーニングを行つていた。その甲斐あって、彼は夜中、魚の存在に気が付かなかった。私と魚はともに達成感に包まれながら、気持ちよく眠りについた。しかし、それがいけなかった。達成感はあまりに気持ちがよく、ぐっすり眠りすぎたのだ。私も魚も油断していた。暗かったはずの部屋は、朝になるとカーテンからの木漏れ日がまぶしい。彼の部屋はとて日当たりが良かった。薄いシートと私と魚。先に起きたのは彼だった。おはようと言われて目を覚まし、寝ぼけて目を擦りながら上半身を起こすと、薄いシートが捲れてしまった。彼の視線は私の胸よりも、私の右腰上にくぎ付けだった。魚も寝ていたが、視線に気が付いて目を覚ましていた。そして、あるうことか、動揺し

て素早く一回転してしまった。魚は困ったときは大抵これをやる。そして、そんな魚より動揺したのが彼だった。彼の黒目も素早く一回転して、「えっ」と小さく呟き、目を真ん丸にして私を見つめた。そして瞬き三回。そんな彼を見つめながら、私は魚をやさしくひと撫でした。見つかったね、でもいいよ。きのうはよく頑張ったよ。撫でられた魚は、気まづくなったのか、すいすいと私の背中に回って彼から隠れた。彼も真ん丸な目のまま、魚を視線で追いかけている。さあ、私の可愛い魚について、たった一つの私だけの秘密について、一体どこから話そうか。

お風呂に入っているとき、私は彼と常に体のどこかをくっつけている。魚と一緒になくてもう五年と一日が経った。昨日は魚と私の誕生日だったから、バスデーケーキを食べた。ネームプレートには私の名前。ケーキのデコレーションは魚の形のチョコプレート。私の体では黒色だけど、ケーキに乗っけられている魚は水色で、丁寧に鱗まで描いてあった。なんだか顔も本物より可愛らしく、目もパッチリだ。本物よりも一回り大きいチョコプレートのプレートはとてもおいしくて、魚も食べられたらいいのになんて思いながら、いやでも私の体にいるということは、私が食べたら魚も食べたことになるのか。そんなことを考えながら味わった。私と彼は、魚たちがより広々と過ごせるように体をくっつけているのだが、私がふざけて離すこともある。私が二匹を独り占めするためだ。彼の左の腰より少し上にある魚が私の体に入ってきたのを見たら、素早く体を離すのがポイントだ。彼はそれを察すると、取り返そうと体を近づけてくるから、私は二匹を独り占めするために彼と闘わなければならない。今も二匹は私のおへその周りでぐるぐると追いかけてくっつけている。私の魚より彼の魚の方が少しだけ小さい。そんな彼の魚も、彼のことも、私は深く愛していた。

気が付いたら家族が一人増え三人になり、私たちは三人でゆっくりお風呂に入りたいと、お風呂が大きなマイホームを建てた。私たちの愛するお姫様は、私と彼と、そして私たちの魚のことが大好きだ。初めてのお絵かきは、ママでも、パパでもなく、二匹の愛する魚だった。そしてある日、彼の体に小さな魚が増えていたのだ。見つけたのはお姫様だった。確かに彼の魚が最近少し大きくなったような気もしていた。でもそれは彼が少し太ったからだと気軽に考えていたから、久しぶりに魚に驚かされてしまった。私たちは毎日お風呂で楽しく過ごしてきたようだ。そして、その小さな魚はなんと私たちの愛するお姫様のことが大好きなのだ。大きなお風呂の夢のマイホームは、悩みの種に早変わりをした。毎日お風呂で彼女の体に移動しようとする魚を、私たちは必死で阻止し、そしてお姫さまは何とか自分の体に小さな魚を迎えようと必死だからだ。二人と二匹は、お風呂以外は小さなマイホームで、今度はどんなトレーニングをするべきか、夜な夜な話し合っている。